KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART

神田日勝記念美術館だより

神田日勝《風景》1966年頃　油彩・ベニヤ　37.9×45.5cm　個人蔵

KANDA NISSHO MEMORIAL MUSEUM of ART
神田日勝記念美術館
〒081-0292 北海道河東郡鹿追町東町3丁目2 TEL.0156-66-1555
http://kandanissho.com/

2017.3.31
34

館長に就任して

神田日勝記念美術館館長　小林　潤

神田日勝記念美術館は開館して24年目を迎えようとしています。この間、館の建設準備からオープンの頃の黎明期を陣頭指揮された初代の米山将治館長。広く人々に愛されるファミリー美術館を提唱された高橋揆一郎2代目館長。日勝と同年代に生まれ日勝を深く探求され、日勝に関する啓蒙書を数多く編纂し日勝の画業とその名を広く世に知らしめて戴いている小檜山博第3代館長（現神田日勝記念美術館名誉館長）。これら北海道を代表する文豪であられる美術館長と、美術館建設の10年も前から建設運動に奔走され、オープンの後も国内を東奔西走し、美術館の存在も世に定着させた第4代の菅訓章館長等、歴代の名だたる館長によって着実且つ大胆とも言える運営がなされてきました。しかし、美術館開館25周年を目前に控えて、昨年1月菅前館長が急逝されました。今、一周忌を過ぎ改めて生前皆様にお世話になりましたことを深謝致しますと共に、全美連の総会では黙祷を捧げて下さり、以降も関係する皆様方から美術館の運営に変わらぬご支援いただいておりますことにお礼申し上げます。

また、十勝管内では、美術作家の皆さん方が様々なジャンルの垣根を越えて菅前館長を偲び「菅訓章氏を偲ぶ・十勝の美術作家展」を開こうとされています。

この十勝の作家諸氏のご厚志に、敬意と謝意を表すると共に、これまで以上に作家皆様の輪が広がる機会になって頂ければと、美術館として出来得る限りの動きも模索しているところです。

この度、美術史上に定位される画家である神田日勝を顕彰する美術館の運営という重責に携わることとなりましたが、日勝資料のデータベース化や証言記録の精査・調査などは急務の課題です。さらに他館との連携事業や地元民に愛される活動拠点としての活動推進など課題は山積していますが、皆様のご指導を戴きながら着実な歩みを進めたいと考えています。

寄稿文

大地とマチエール―神田日勝との出逢い

多摩美術大学教授　本江邦夫

私が神田日勝のことをはっきりと意識したのは、一昨年だったか、非常勤で行っていた女子美術大学の昔の教え子、守美音（もりみおん）さんからその画家の記念館で個展をするという話を聞かされたときだった。女子美を出てこつこつと制作を続けてきた教え子の最初の企画展。しかも、場所は帯広のあたりだという。北海道は―札幌と小樽だが―私が小・中学校時代を八年間過ごしたところだ。特別の愛着がある。これは見に行かずばなるまい。それにしても、神田日勝？―この奇怪な名前の画家は何者なのか。いや、それ以前に、その人の名を冠した道東の美術館で、神奈川県秦野市出身の守さんがなぜ企画展をしてもらえることになったのか。

今は亡き菅前館長に声をかけられたのだという。面識は無かったが、前館長は銀座界隈で頻繁に画廊巡りをするので有名な人だった。それにしても、なぜ守美音？　日勝について少し学び、作品も実見した私が今強く思うのは、分厚く盛り上げたマチエール（絵具の物質的な状態）の親近性である。ふつうに抽象画を描き、有名な公募展にも入選していた守さんが、絵具を洋菓子の生クリームのように使いだしたのは割と最近のことだ。そこに菅さんは反応したのではないか。

とはいっても、日勝のマチエールははるかに重厚で、まるで大地の一部のようなところがある。ここに実存的なものを感じるのは私だけではあるまい。と同時に、このマチエールが画家の過酷な日常のすべてを担う、いわば受肉すると同時に、切り裂かれた牛の真紅の腹のように、存在の奥底から突出してくる芸術意欲そのものに他ならないことも指摘しておきたい。

芸術家とは三次元、四次元（時間）を超えたn次元空間のなかで明滅する1個の点のごときもの―放たれる光こそが作品であり、私たちはひたすら見上げる者たちだ。鈴木正實氏の名著『二度生きる―神田日勝』を熟読して思うのは、類まれな農民画家の奥深さと、意外なまでの現代性だ。神田日勝研究はまだ始まったばかりである。

守美音〈ブルーローズケーキ〉

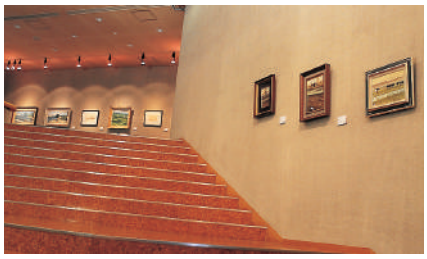
平成28年度 常設展

第1期常設展「神田日勝～その画業の流れを追って」

会　期：7月5日(火)～11月6日(日)
入場者：3048名

幼い頃に十勝・鹿追町に開拓農家として移り住み、生涯にわたって農業を営みながら独学で油絵を描いた神田日勝。その生涯は短く、わずか32歳で病没しますが、およそ15年にも満たない年月に作品は多様な変化を見せ、北海道の大地に根差した力強い表現が数多く生まれました。

本展では、当館が収蔵する神田日勝の代表的な作品を初期のものから最晩年の「未完の馬」まで制作順に並べ、37点の絵画作品でその画家としての歩みと画風の変化を辿りました。さらに、個人が所蔵する日勝作品《風景》(※表紙画像)をこのたび初めてご紹介させていただきました。



第2期常設展「私のお気に入りの日勝さん Part Ⅱ」

会　期：1月24日(火)～4月23日(日)
入場者：490名(3月31日現在)

平成26年に来場者を対象に実施したアンケート「神田日勝記念美術館所蔵作品による、神田日勝のこの一点」の投票結果にもとづき、人気を集めた作品と作品に寄せられたコメントを会場内で紹介しました。

全1866票中432票を集め、第1位に輝いたのは、当館のロゴ・マークにもなっている《馬(絶筆・未完)》でした。以下に上位3作品に寄せられたコメントをいくつかご紹介します。

今回は、皆様にご記入いただいた作品の感想・「お気に入り」の理由・印象深いエピソードを会場内で公開しました。誰かの言葉に共感したり、新しい見方に出会ったりしながら、日勝作品の魅力や解釈が広がっていくことを目指しました。

主なコメント

第1位《馬(絶筆・未完)》

- 「今にもゆっくり歩いて、でてきそうな、命を感じる作品です。未完なのに、何か全てを語っているような、ぜったい見るべき作品だと思います。」(新ひだか町・女性)
- 「初めて日勝さんの作品を拝見した時に未完成の馬の目がいつまでも忘れられず。何と優しい瞳でしょうか。」(札幌市・女性)
- 「未完なのか、これが完成なのか。何かを表現しているのか。それがおもしろい。」(小樽市・男性)
- 「完成出来ずに悔しい思いだろうな。泣きそうになった。」(苫小牧市・女性)

第2位《飯場の風景》

- 「苦悩に満ちた北海道開拓の歴史を想起するから。」(石狩市・男性)
- 「若くして亡くなった父は飯場を移動しながら山の仕事をしていました。画家には“名もなきもの”に注がれる敬いの眼差しがあると思います。」(北見市・女性)

第3位《雪の農場》

- 「見たときに、ホッとする感じがしました。」(北見市・女性)
- 「雪景色でありながら、あたたかみを感じ、いつ見ても大好きな絵です。」(芽室町・女性)

平成28年度特別企画展

神田日勝と北海道の独立美術

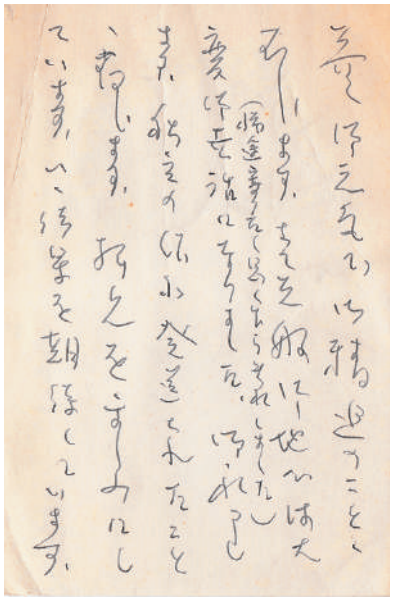
会　期：平成28年5月10日(火)～7月3日(日)
入場者数：1572名

神田日勝は1964年の第32回独立展(独立美術協会展＊)に作品《人》を初出品・初入選を果たして以降、秋の独立展本展に加え、春は全国の気鋭画家による選抜展、夏は道内の全道展を主要な活動の舞台としました。特に1970年の第38回展は、遺作展示された《室内風景》が宋左近の注目を浴びたこともあり、神田日勝の名を一躍知らしめる契機となりました。

中央画壇との接触は画風に影響をもたらし、抽象表現主義の熱気を浴びながら、具象と抽象の狭間を揺れ動く様子が看取できます。65年頃に写実的な画風で《死馬》や《牛》を描いた後、66年から67年にかけて原色の色面構成による「画室」シリーズ、68年から69年にかけて豪快な筆使いで抽象表現主義風の「人と牛」、「人間」シリーズを展開させました。

画家が独立展を目指したのは、寺島春雄(1911-66)や砂田友治(1916-99)、栃内忠男(1923-2009)ら全道展の先達の影響によるものと考えられます。本展は道内画家を中心に構成し、その3名のほか、まずは独立展創立時に道内洋画界を牽引した三岸好太郎(1903-34)、国松登(1907-94)、菊地精二(1908-73)らの作品、第33回展で日勝の《死馬》・《馬》の審査に携わった松樹路人(1927-　)、本展・選抜展で新鋭として日勝と肩を並べた竹岡羊子、十勝で日勝とともに独立展を目指した渡邉禎祥(1934-　)や岡沼秀雄(1937-　)、そして道外画家として北海道ゆかりの杢田たけを(1910-87)の作品を展示しました。

関連資料として、松樹が日勝の写実的画風に好意的見解を述べた第33回展審査評(『独立クロニクル』1965年)のほか、画家本人が新たな画風挑戦と独立展への野心を綴った画友・徳丸滋宛の書簡、そして本展初公開の資料として、杢田と日勝の交流の様子を示す2通の書簡を展示し、独立展を通じて見出される他の画家達との関係性をご紹介しました。



杢田たけをからの書簡　1969年9月15日　神田日勝記念美術館

益々御元気で御精進のことと存じます。さて先般御地では大変御世話になりました。御礼申します。独立の作品発送されたことと存じます。拝見をたのしみにしています。いい結果を期待しています。

(帰途寄りたく思ひ乍ら失礼しました)

用語解説

＊独立美術協会展

欧州留学から帰国した洋画家たちから成る1930年協会を前身として、里見勝蔵、児島善三郎、林重義、林武、川口軌外、小島善太郎、中山巍、鈴木亜夫、鈴木保徳、伊藤廉、清水登之、高畠達四郎、三岸好太郎、福沢一郎ら14名の洋画家により昭和5年11月に創立、翌年5月第1回独立展を東京府美術館にて開催。

既存画壇からの独立と新時代の美術の確立を標榜し、フォーヴィスム、シュルレアリスム等、パリを中心に興った前衛美術の潮流を汲んだ先鋭的な美術団体として昭和初期の洋画界に大きな影響を与えた。

神田日勝《一人》1964年　北海道立近代美術館蔵

松樹路人《古典風の女》1977年
北海道立近代美術館蔵

神田日勝《死馬》1965年
北海道立近代美術館蔵

竹岡羊子《夜のパレード》
1980年　札幌芸術の森美術館蔵

栃内忠男《灯》1959年
北海道立近代美術館蔵

iPod音声ガイド

協力:北海道帯広柏葉高校放送局

神田日勝記念美術館ではiPodによる音声ガイドの無料貸出を行っています。

今年度は北海道帯広柏葉高校放送局の協力のもと、同局の高校生による音声解説を提供させていただきました。

■関連事業■

ギャラリー・トーク

日 時：①5月28日(土)14:00～14:30
　　参加人数：12名
　　②6月25日(土)14:00～14:30
　　参加人数：19名
案 内：当館学芸員

ピアノトリオコンサート

出 演 者：牧野 貴博 氏(ヴァイオリン)
　　佐藤 祐一 氏(チェロ)
　　波塚 三恵子 氏(ピアノ)
日　　時：6月25日(土)18:30～19:30
参加人数：76名

尾道市立美術館名品展
小林和作とその周辺

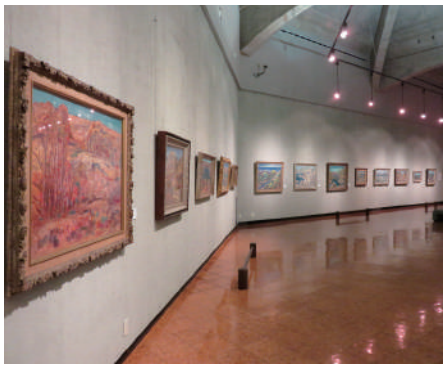
会　　期：平成28年11月26日(土)～平成29年1月9日(月祝)
入場者数：308名

尾道市立美術館との収蔵品交換展として同館の優れた名品を紹介する「尾道市立美術館名品展 小林和作とその周辺」を開催しました。

尾道ゆかりの風景画家・小林和作(1888－1974／山口県生まれ)は神田日勝にとって独立展の先輩にあたり、1964年～70年は出品時期も重なります。「和作さん」の愛称で地域に親しまれ、運命的に生まれ故郷とは異なる土地に辿り着き、さらに生涯を通じてその土地の風土を描き続けた点で、日勝と相通じるものがあります。

和作が全国の景勝を訪ねて描いた作品群は、絵具と絵筆が触れることで形成される筆触(タッチ)が一面に広がり、間近で見ると色とりどりの結晶で埋め尽くされているかのようにきらめき、豊麗な世界を織り成しています。特に最盛期に描かれた《水溜りと海(紀州の海)》は、構図の洗練もさることながら、ペインティング・ナイフのひと塗りに赤や紫、黄色などの色が入り混じり、細部はまるで抽象画のような味わいがあります。比較対象として日勝の風景画6点を展示しましたが、その筆触(タッチ)を比較すると、日勝作品の場合は隅々まで同じ調子で筆が入れられており、まるで広い耕作地を均質に耕すことを心がけたかのような画家の「仕事」が浮かびあがって見えてきました。

小林和作の周辺画家としては、日本画家として出発した和作が洋画の師と仰いだ梅原龍三郎(1888－1986)と中川一政(1893－1991)、さらに独立美術協会創立会員の清水登之(1887－1945)らを取り上げ、大正から昭和初期の洋画界を牽引した神田日勝の先達たちとしてご紹介しました。

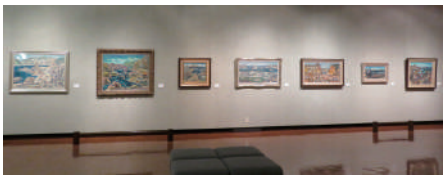


小林和作《水溜りと海(紀州の海)》1954年

清水登之《尾道の景色》1933年

小林和作《白馬山下の春》1957年

小林和作《梅》1935年



■関連事業■

美術講座
「事前レクチャー：尾道コレクションの魅力を学ぶ」

日時：11月9日(水)18:00～19:00
会場：美術館2階団体活動室
講師：梅林信二学芸員(尾道市立美術館)
参加人数：24名

ギャラリー・トーク

日時：11月26日(土)
　　11:00～11:30
案内：当館学芸員
参加人数：22名

「北海道の大地から 神田日勝展」

会　　期：平成28年11月19日(土)～平成29年1月15日(日)
会　　場：尾道市立美術館(広島県尾道市)
入場者数：4,299名

主催：尾道市立美術館
共催：中国新聞備後本社
後援：広島県、ＮＨＫ広島放送局、尾道エフエム放送、尾道ケーブルテレビ、エフエムふくやま
協力：神田日勝記念美術館、北海道立近代美術館

寄稿文

特別展「北海道の大地から 神田日勝展」を終えて

尾道市立美術館　学芸員　梅林　信二

平成27年9月14日（月）、鹿追町役場の始業時刻と共に、菅館長に連れられ、町長室にて、小林教育長（現・館長）同席のもと、吉田町長に展覧会開催に向けてのご挨拶をさせていただきました。

この年の4月に10年振りに美術館勤務を命じられ、前任者から引き継いだ展覧会として不安も抱えながらの北海道入りでした。菅館長が、「これで決まりました。」とニンマリと微笑みながら美術館に移動した後、事務所で展覧会について具体的に協議を行ったことを昨日のように思い出します。

翌年1月13日（水）、当館との交換展調査のため、尾道に訪れていた川岸学芸員のもとに1本の電話がかかり、涙を溜めながらの受け答えに、「大丈夫ですか？」と尋ねると、菅館長の訃報連絡でありました。

菅館長の死は、本展の精神的支柱の喪失を意味する一方、残された者で、何としても開催に漕ぎ着けなければという力強いオール（櫂）となり、今回の展覧会実現に繋がったと思います。

私が関わった経過は、大きく以上の通りですが、「尾道で、なぜ神田日勝なのか？」という問いについて、次に記したいと思います。

これまでも当館では、普段は鑑賞する機会の少ない、北海道の特色ある美術館コレクションを紹介する展覧会を旅するシリーズと位置づけ、平成23年度に「小泉淳作展―中札内美術村・小泉淳作美術館コレクション」、平成25年度には、「須田剋太展―北海道・新星館コレクション」を開催してきました。

■関連事業■

特別講演
「神田日勝と北の大地 しかおい」
講師：小林 潤（神田日勝記念美術館館長）
日時：11月19日
会場：尾道市立美術館 ロビー

展覧会オープンを祝し、当館館長・小林が記念講演を行いました。神田日勝が開拓農家として入植した当時の鹿追の状況から、今日の鹿追の文化や基幹産業までを尾道の来館者にご紹介しました。

提供:尾道市立美術館

提供：尾道市立美術館

本展は、シリーズ第3弾として企画され、神田日勝記念美術館のコレクションを中心に、北海道立近代美術館の代表作を加え、西日本初の紹介を試みた展覧会であります。

神田日勝を紹介するにあたり、まず心掛けた事は、制作年順に展示し、展示室ごとに画風の変遷を意識できる構成にすることで、最終展示室にて各時代の作品が混然となり、最後の展示作品《馬（絶筆・未完）》に集約されていくイメージを意図しました。

展示室では、作品ごとの解説は行わず、年表と作家自身の言葉そして写真パネルのみとし、日勝の作品の力を信じ、作品に対し、ニュートラルな感性で鑑賞していただける空間を目指しました。さらに興味を持たれた方に向けては、ロビーにて日勝の映像を流し、そして、ショップにて画集を販売しました。神田日勝記念美術館にて制作された画集は、会期中に売り切れるなど、異例の売り上げであったことを付記します。

また、クリスマスに放映されたNHK「日曜美術館」のアートシーンに取り上げられたこともあり、年明けから県外のお客様に多く来館していただき、会期が終わりに近づくにつれ、入館者が増加し、あらためて日勝の人気の高さを知ると共に、素晴らしい作家だと再認識しました。

最後に、北海道と尾道の縁を紡いでいただいた神田日勝、そして神田ミサ子様をはじめとする関係者の皆様に感謝すると共に、亡き菅館長へ、「お蔭様で無事に展覧会を終えました。」と報告して、本寄稿文を終えたいと思います。

神田日勝記念美術館
運営協議会研修

尾道市での神田日勝展開催にあわせ、運営協議会委員の研修が行われました。協議会としての研修は十数年振りで、初の道外研修でした。

尾道市立美術館は安藤忠雄氏が増築部分を手がけているとのことですが、日勝館のようにひとつの大きな展示室ではなく6つの独立した展示室に作品が陳列されていました。日勝の大作を鑑賞するにはやや窮屈感もありましたが、環境が変わり新鮮な印象を覚えました。

他にもひろしま美術館、平山郁夫美術館、大原美術館など幾つか近隣の美術館も観てまわりましたが、共通点として、地域経済人が美術館を支える積極的役割を果たしていること、収蔵作品が現在とどう繋がっているのかが意識されていること、青少年の美術への関心・成長を育む取り組みを積極的に行っていることを強く感じました。

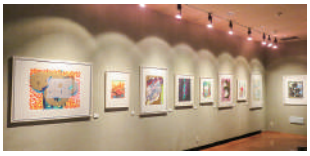
運営協議会委員長
武田　耕次

展覧会事業実行委員会主催事業

堀越千秋展「西の国から」

4月19日(火)～5月8日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］497名

ANA機内誌『翼の王国』の表紙画で親しまれ、マドリード(スペイン)を拠点に、画家、陶芸家、カンタオール(フラメンコの歌い手)として様々な表現の舞台で活躍する堀越千秋の作品28点を展示。画廊香月の企画協力のもと、色鮮やかなシルクスクリーンをはじめ、木版、リトグラフが会場に並びました。



※堀越さんは10月31日マドリードにてご逝去されました。
心よりご冥福をお祈りいたします。

守美音(もりみおん)展 スウィート・ハート―癒しの森へ

7月5日(火)～7月18日(月・祝)
神田日勝記念美術館
［入場者数］411名

然別湖に滞在し、その風景を描いた新作《チョコミント・然別湖》、《チョコミント・くちびる山》をはじめ、デコレーション・ケーキやドレス、セーターをモチーフに造られたアクリル画23点を展示。作家のアイディアにより、「午後のティータイムのような、ゆったりとした空間」づくりが目指されました。

小野月世水彩展～光を描く

7月20日(水)～8月7日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］601名

水彩絵具の動き、流れ、滲みを巧みに操りつつ、バレエのレッスンを受ける踊り子や、色とりどりに咲く花を描いた小野月世の水彩画20点を展示。水彩画ならではのマチエールの美しさが際立ちました。

松本竣介の芸術性を愛し続けた友人 畑山昇麓(しょうろく)コレクション・撰

8月9日(火)～8月28日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］622名

萬鉄(よろず)五郎記念美術館（岩手県）が収蔵する、畑山昇麓(しょうろく)コレクションによる企画展。芸術愛好家・畑山の鑑識眼により蒐集(しゅうしゅう)された作品の中から、その友人・松本竣介を筆頭に、麻生三郎、海老原喜之助、鶴岡政雄、藤田嗣治らの絵画、版画、デッサン27点を選りすぐりで展示。

本城義雄回顧展

8月10日(水)～8月28日(日)
鹿追町民ホール
［入場者数］661名

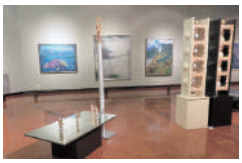
鹿追に生まれ、現在は歌志内(うたしない)在住の画家・本城義雄(全道展会員・国展準会員)の回顧展を開催。細部まで緻密に描かれた130号の大作《鎮座するものたち(石の卵)》をはじめとする油彩画37点のほか、画家が収集し、作品にもモチーフとして描かれている明治～昭和の骨董品約80点が所狭しと並び、空間全体が本城の世界で彩られました。

第20回記念 全道展十勝地区展

11月8日(火)～11月13日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］373名

神田日勝が所属していた全道展（全道美術協会）・十勝地区展が本年20周年を迎え、同団体協力のもと、第20回記念展が開催されました。日勝が生前出品していた頃からのベテラン勢から、初入選の若手までが集まり、絵画、版画、彫刻、工芸42点が展示されました。

本展の開幕前夜には、オープニング・レセプションも催されました。



板東優　透明な闇

9月13日(火)～10月16日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］934名

帯広出身で現在NYを拠点に活動する彫刻家・板東優の彫刻展。神田日勝の絵画とのコラボレーションとして木彫《かはたれどきのピエタ》、ブロンズ《破壊》と《造形》など、光と闇／生と死／始まりと終わりをテーマに表現された彫刻作品7点が並びました。

さらに美術館前「千の公園」ではブロンズ《造形》の屋外展示も行いました。

第10回　北海道現代具象展

11月15日(火)～11月23日(水・祝)
神田日勝記念美術館
［入場者数］197名

本年「第10回」をもって終了となる北海道現代具象展の巡回展を開催しました。木村富秋、輪島進一ら同展実行委員会に所属する23名の道内作家に加え、笠井誠一、市野英樹、中嶋明の3名の招待作家を含む、26名34作品が出品されました。

第17回　グループ環展　鹿追移動展

1月11日(水)～1月22日(日)
神田日勝記念美術館
［入場者数］241名

「グループ環」は、道展、全道展、新道展など、道内それぞれの美術団体に所属する画家たちの中から、「具象画の魅力をより多くの人に楽しんでもらいたい」という想いにより団体の枠を超えて結成された美術グループです。鹿追の風景も含め、風景画・人物画など、16名の画家による親しみやすい作品が並びました。

第22回　蕪墾祭

6月17日（金）
神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール
［参加人数］195名

美術館の開館（平成5年6月17日）を祝う会「蕪墾祭」の幕開けとして、展示室で行われたコンサートでは、「十勝やまなみ合唱団」の歌声が披露されました。「ワインとチーズの交流会」では、美術館・友の会から日頃の感謝の想いをこめ、十勝のワインやチーズのほか、友の会会員有志の手作り料理が振る舞われ、意見交流の場が設けられました。

第14回　日勝祭

12月8日（木）
鹿追町民ホール・神田日勝記念美術館
［参加人数］304名

講演会では、帯広在住の現代美術家・池田緑氏を講師に招き、「とかちの美術―黎明期―」と題し、明治時代から神田日勝が活動した昭和40年代にいたるまでの十勝の美術史についてご講演いただきました。講演に際し、前館長・菅訓章の十勝美術史編纂への貢献についても講師から説明がありました。

講演会後は、鹿追町内外から日頃から美術館を支えてくださっている方々にお集まりいただき、交流会が開かれました。

第24回　馬耕忌

8月28日(日)
神田日勝記念美術館・鹿追町民ホール
［参加人数］55名

「馬耕忌」は、神田日勝の画業を偲び、開館以来毎年、日勝の命日(8月25日)に近い日曜日に合わせて開催されています。

本年のプログラムは、まずは萬鉄五郎記念美術館・中村光紀館長による「畑山昇麓コレクション・撰」ギャラリー・トークに始まり、座談会「地域に根ざす美術館を考える」では、当館館長・小林の進行のもと、地域との関係構築をテーマに萬鉄五郎記念美術館・平澤広学芸員、岩手町立石神の丘美術館・齋藤桃子学芸員及び当館学芸員の川岸が各々の現状と課題を報告し、意見交換を行いました。さらに今年も、田中光俊さんがギター演奏で花を添えてくださいました。

芸術鑑賞　バスツアー

5月29日（日）
アルテピアッツア美唄・苫小牧市美術博物館
［参加人数］32名

本年のバスツアーでは、まずは安田侃の彫刻で知られるアルテピアッツア美唄に赴き、野外彫刻を鑑賞した後、苫小牧市美術博物館で開催中の企画展「生誕100年記念　砂田友治展」を観覧しました。両館とも学芸員に解説をしていただき、作品や美術館運営についての理解を深めることができました。

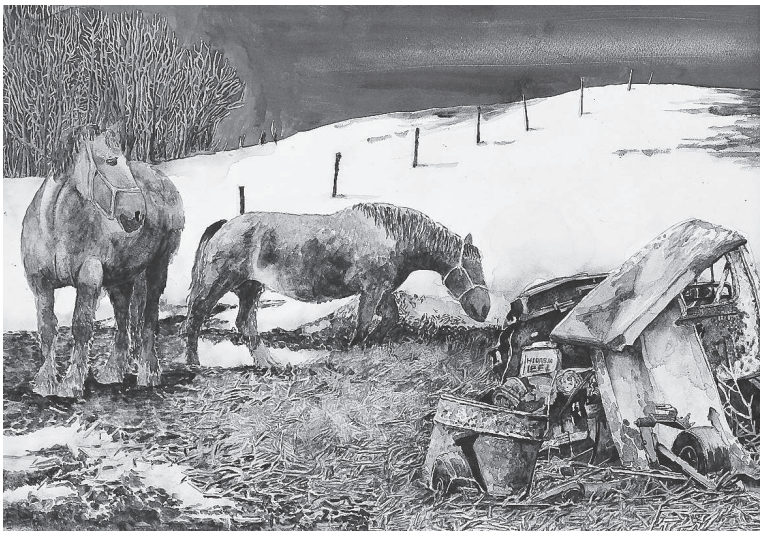
第22回 馬の絵作品展

10月4日（火）～10月11日（火）
鹿追町民ホール
［応募点数］ 864点

今年の作品は初期の頃と比べてテーマや表現技法とも一段と工夫が見られます。

例えば馬の毛並や集団で走り抜けた土埃の様子など、見たり感じたものを上手に表現できるようになりました。小・中学生の高学年は丁寧に描き込まれ細部の影の表現など、いい作品を創ろうとする意欲を感じます。絵の構図では強さとか動きを出すのは賛成ですが、身体の一部が欠けていたり困難さを避けようとする作品が少しあるのは残念です。また、馬の腹の毛がすり減って皮が見えるところなど、最近はあまり見られませんが、働く馬の痕跡がわかるものがあったら素晴らしいと思います。題材を色々探して頂きたいと思います。

審査委員長　齊藤隆博
※講評より一部抜粋

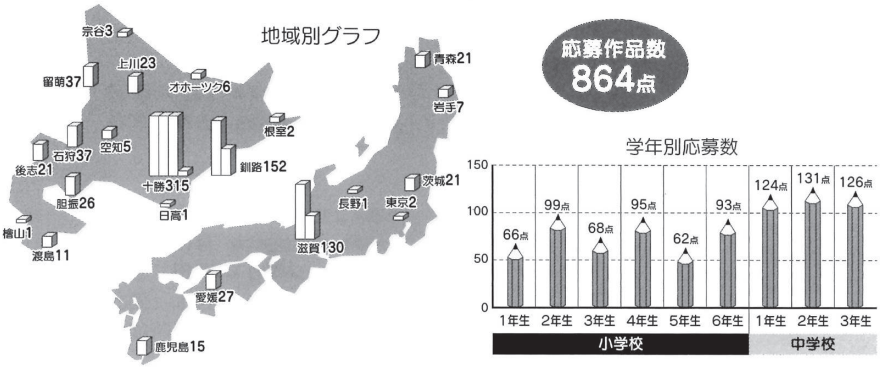


文部科学大臣賞／千歳市立東千歳中学校　3年　穂積　佳

第22回 馬の絵作品展 入賞者一覧

■入賞者一覧

［文部科学大臣賞］	千歳市立東千歳中学校	3年	穂積　佳
［北海道知事賞］	釧路市立鳥取中学校	2年	田甫　藍那
［北海道教育委員会教育長賞］	標茶町立塘路小学校	5年	鮎川　春生
［鹿追町長賞］	釧路市立鳥取中学校	2年	安部　主馬
［鹿追町教育委員会教育長賞］	釧路市立鳥取中学校	3年	桶谷　蘭
［神田日勝記念美術館長賞］	栗東市立大宝東小学校（滋賀県）	4年	龍後　昊平
［北海道新聞社賞］	釧路町立別保小学校	3年	森田　菜央
［十勝造形サークル委員長賞］	豊頃町立豊頃小学校	6年	小澤　歩未
［帯広市教育研究会図工美術部会長賞］	中標津町立計根別学園	2年	吉本　萌夏
［ＪＲ北海道社長賞］	鹿追町立瓜幕小学校	1年	水間　櫻子
［北海道電力（株）帯広支店長賞］	室蘭市立海陽小学校	5年	土井こころ
［帯広信用金庫理事長賞］	釧路市立鳥取中学校	1年	一森　彩雪
［ホテル福原社長賞］	千歳市立東千歳中学校	1年	中山　芽映
［学校賞］	釧路市立鳥取中学校		



表彰式　10月8日（土）

文部科学大臣賞を受賞した穂積佳さんをはじめ、北海道内外（遠くは滋賀県）から受賞者が参加し、それぞれ緊張した面持ちで賞状を受け取っていました。

展示会場では、自分の作品をご家族と一緒に探し、作品の前で誇らしげに記念撮影する姿をあちこちで見かけました。

馬の絵写生会

7月29日（金）
鹿追町ライディングパーク
［参加人数］ 38名

町内施設で本物の馬を間近に見ながら「馬の絵作品展」にむけての写生会を行いました。雨天のため例年より観察時間が短かったものの、講師の和田仁智（にちぎ）義先生、内藤智香先生から、馬の顔や身体つきの特徴の捉え方、色の塗り方についてアドバイスを受けながら、各々完成を目指しました。

合間に乗馬体験を行い、より身近に馬を感じて表現へと繋げられる機会となりました。

■新規寄贈作品 紹介■

守　美音《チョコミント・然別湖》2016年
アクリル・キャンバス
53.0×72.7cm（20号P）

小野　月世《花満ちる》2015年
水彩・ワトソン紙
145.5×112.0cm（80号F）

感想ノートより

2016.9.18 9/10に白老のTOBIU CAMPに参加し、奈良美智さんがこちらに立ち寄った際の話をされ、ちょうど帯広に来ることがあったので、来ました。馬の絵は知ってはいましたが、実際にみて、そして、生家で子供の頃農耕馬を飼っていてその馬小屋の匂いを鼻の奥で感じて涙が出ました。絵が書かれたのが私の生まれた昭和40年。日勝さんが生まれた年は、父の生まれた昭和12年で（父はまだ健在です）時代を共有していたのかなあと思いました。ありがとうございました。

札幌市　H.S

2016.10.15　私と日勝の作品との出会いは帯広の弘文堂画廊で彼が売絵を描いた油絵の作品です。当時私は高校1年生の頃だったと思います。初めてみた作品はカラマツ林（防風）の風景でした。すっかりその作品にすいこまれてしまっていた私を思い出します。そのことがキッカケで今も油絵のとりこになっています。あの頃のことを思い出してくれる作品を鑑賞できて今日ここにきてとても良かったと思います。

O.K

10月　ここに来れてよかった。油絵の力強さを再認識できた1日であった。そう思えることはとても幸せなのではないか?今一度自分のおかれている立場というものを考えていきたい。とにもかくにもありがとう神田日勝先生。

秋田県　M.T

2016年11月13日　日勝美術館の落着いたたたずまいに心おだやかになりました。ゆかりの全道展地区展の一員として作品を展示できたこと感謝します。日勝が亡くなった年、最後の展覧会の飾り付けを一緒にしたことが思い出されます。あれからほんのわずかな日数で亡くなるとは、その日は知りもしませんでした。小生も1週間後古稀を迎えます。生あることに感謝し作品をつくりたいと思います。ありがとうございました。

帯広市　H.M

書籍紹介

「訪れた人の心を揺さぶる美術館」として当館が取り上げられました。

『企画展がなくても楽しめるすごい美術館』

（藤田 令伊/ベストセラーズ/2016年）

神田日勝記念美術館は私にとって特別な美術館です。仕事柄、私は国内外の美術館をけっこうたくさん訪ね歩いていますが、これまででもっとも感動を覚えた美術館がここだからです。1965年の《馬》。一頭の大きな黒毛の馬が描かれていました。馬の横腹には毛のない部分があり、私は最初、怪我をしたのかと思っていました。しかし、それが胴引きの跡だとわかった瞬間、まるで悟りを得たような衝撃が心に走り、ふと気がつけば、私の頬には熱い涙が伝っていました。絵を見てそんなふうになったのは初めてでした。以来、私にとって神田日勝記念美術館は特別な存在となりました。絵とはこんなにも素晴らしいものだったのだ、と改めて私に教えてくれた美術館なのです。（著者コメント /2017 年2月）

書籍画像（表紙）

藤田　令伊／ふじた・れい
1962年、奈良県生まれ。
アート鑑賞ナビゲーター、大正大学文学部非常勤講師。

子どもワークショップ

■親子ワークショップ「手品道具を作ろう！」

講師／中西 宣夫 氏　加藤 節子 氏
木村 美枝子 氏（十勝マジック愛好会）
11/23（水・祝）　鹿追町民ホール
参加人数：29名

親子で参加できるプログラムとして、十勝マジック愛好会協力のもと、手品のタネづくりのワークショップを実施しました。ひとつのコップに入れた2色のビーズが、一瞬にして色別に分かれてしまうマジックなど、3種類の手品道具を親子で協力して作りました。

その後は講師陣によるマジックショーも披露されました。

■子ども芸術鑑賞ツアー

10/22（土）　北海道立帯広美術館ほか
参加人数：22名

北海道立帯広美術館開館25周年記念展「国立美術館・煌めく名作たち」では、日本洋画界を代表する岸田劉生を始め、近代を彩る日本画・洋画の名品を鑑賞しました。

帰り道には「明治十勝チーズ館」に立ち寄り、鹿追の農家でもたくさん生産している牛乳が、チーズに変わっていく工程を学びました。

■夏休みワークショップ「スーパーかみひこうきを作ろう！」

夏

講師／木川 博史 氏（帯広紙飛行機を飛ばす会）
8/2（火）　鹿追町民ホール、屋外
参加人数：15名

一枚の紙から作る紙飛行機と、キットで組み立てるプラスチック製の飛行機の2種類を作りました。より遠くに飛ぶ折り方を教わり、中には、ホワイトホールの端から端まで（約10メートル）を飛行する物もありました。屋外ではプラスチック飛行機を勢いよく飛ばし、空高く舞い上がるその姿に驚きと感動の声が上がりました。

■冬休みワークショップ「オリジナルおちゃわんを作ろう！」

冬

講師／鹿追町陶芸工作館職員
1/12（木）　鹿追町民ホール
参加人数：24名

地元鹿追の陶土を使用して焼き上げる鹿追焼きの茶碗に、星やハート、トラクターなど、各々好きな形に陶芸用転写紙を切り貼りし、模様や柄をつけるワークショップを行いました。

■春休みワークショップ「まが玉のペンダントを作ろう！」

春

講師／伊藤 彩子 氏（帯広百年記念館学芸員）
3/26（日）　鹿追町民ホール
参加人数：42名

日本古来の装飾品であるまが玉を石から手作りしました。素材となる白濁色の石はやわらかく、数種類の紙ヤスリを使い分けて、削ったり、磨いたりしながら形を整えました。苦心の末に、想いを込めて磨き上げられたまが玉ペンダントが完成しました。

■アートキッズクラブ

5/14（土）～2017.2/18（土）
鹿追町民ホール
参加人数：108名

①「生け花オブジェを作ろう！！」、②「ゴムで動く車を作って遊ぼう！！」、③「こものいれにもなる、おきあがりこぼしを作ろう！」、④「日勝かるたをつくってあそぼう！」、⑤「オリジナル万華鏡をつくろう！」の内容で計5回の工作教室を実施しました。子どもたちが思い思いに作った作品にはそれぞれの「色」が出ていて、表現の楽しさを感じる様子を見ることができました。

■水彩画教室

講師／瀧川 秀敏 氏（日本美術家連盟会員・平原社美術協会会長 等）
3/18（土）　神田日勝記念美術館
参加人数：14名

当館では、絵を描くことに親しみを持ってもらうことと、美術愛好者の更なる拡充をねらいに絵画教室を開催しております。

水彩絵具は誰もが子どもの頃から馴染みのある画材と言えますが、今回はプロの指導の下筆の運びや絵具の重ね方を教わり、絵具の特質を生かした表現の面白みを味わいました。

■出前講座

5/18（水）	鹿追町立瓜幕中学校	中学1年生	12名
6/ 8（水）	鹿追町立通明小学校	小学1、2年生	5名
2/15（水）	鹿追町立上幌内小学校	小学3、4年生	2名
3/ 9（木）	鹿追町立通明小学校	小学3、4年生	6名

町内の小中学校を訪問し、出前講座を計4回行いました。神田日勝の写真や作品をスライドで紹介しながら、画家が歩んだ人生や描いた作品を紹介し、美術館で作品を観てもらう際の事前学習をします。また毎年の「馬の絵作品展」の作品制作時期には、過去の入賞作を参考に、構図の捉え方や色の使い方のユニークな点、自由な発想を学びました。